

阿木城だより

阿木城跡保存会
阿木公民館内
2018(H30)年5月 No.1

このほど発行された「阿木の文化遺産」誌に阿木城が紹介されています。誌は区長会のはからいで阿木は全戸配布ですが、ここに改めて要点をご案内します。

戦国末期の姿をまるごと残す

阿木城は天守閣や高い石垣が築かれる前の時代に築かれた城で、土を掘り、盛ることにより造られ、堀や土塁(土手)がほとんど築かれた当時のままだっています。

阿木城は織田信長軍と武田信玄・勝頼軍がこの地方で戦った450年程前、そのどちらかによって造られ、武田軍の退脚とともにその役目を終えたと考えられます。

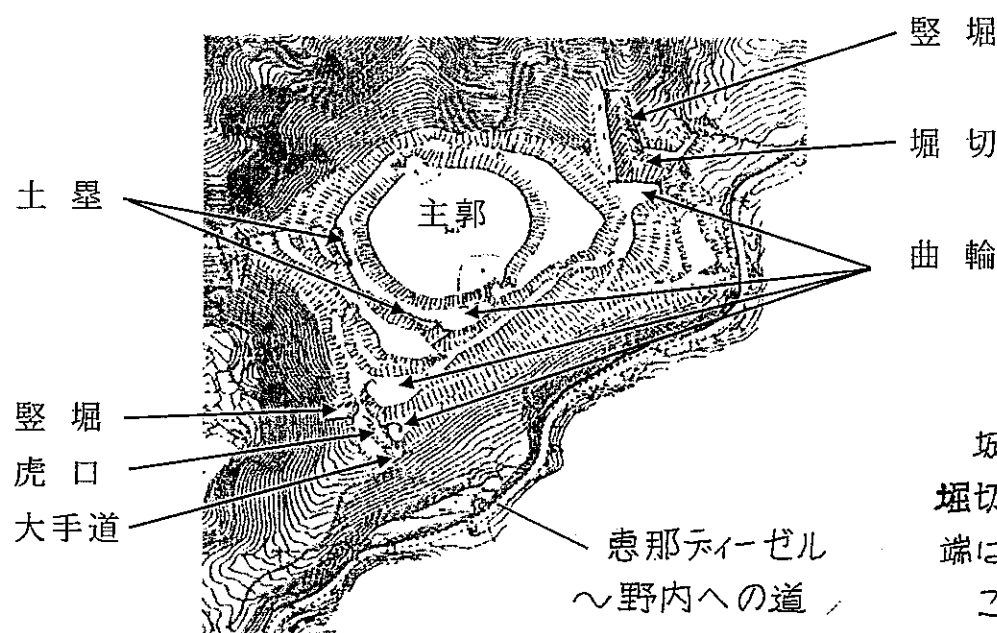
近くにも飯羽間城・明知城など多くの戦国時代の城がありますが、これらと比べ阿木城は主郭(本丸)の占める面積が格段に大きいという特徴があります。何か特別の役割が阿木城にはあったことを伺わせます。

信長軍、岩村城包囲に阿木城使う

「阿木の文化遺産」は恵那市の三宅唯美さんの最新の研究論文を引用しています。

それによると阿木城は、織田信長軍が岩村城を兵糧攻めにしたさい(天正3年=1575年)、岩村城包囲網の城の一つとして使われた

＝「阿木城の縄張り図」＝(高田徹氏作図に記入)



「阿木の文化遺産」より

というのです。

時は織田軍が武田軍に壊滅的打撃を与えた長篠の合戦直後。織田軍は水晶山に陣を構え、街道沿いの阿木城、信の城(飯羽間)、山田城(山岡)、下手向城(山岡)などで交通を遮断したと記されています。

氏は岩村城の発掘調査などを担当されており、その説は傾聴に値します。

下の「縄張り図」は岐阜県教育委員会の調査と、中津川市の測量図をもとに作られたものです。縄張り図はそれ自体が論文にも匹敵するものです。

この図でⅢとなっているところは切岸(きりぎし)と呼ばれる人工的に造った急斜面を表現しており、敵がよじ登るのを防ぐ施設です。

メインルートの大手道から登ると始まりの位置にあるのは虎口(こぐち)で、近世城郭でいう大手門にあたります。両側の切岸と、その上部に造られた平坦な広場＝曲輪(くるわ)で守りを固めています。

次へ進むと堅堀(たてほり)があり、敵が斜面を移動することを防いでいます。

その先の複数の曲輪(くるわ)は侵入する敵を正面、あるいは左右から攻撃できるように築かれています。

主郭を守る両側の曲輪には、土を土手のように盛った土塁(どるい)が2か所ありますが、元は一続きだったと思われます。

城の裏側にあたる所は尾根を断ち切った、堀切(ほりきり)と呼ばれる堀が造られ、先端は堅堀となって北側斜面を下っています。

この堀切は阿木城では最も深く、長いものです。また、尾根に対して直交せず斜めに掘られており、ある程度発達した技術が使われているとみられます。見所の一つです。

主郭(しゅかく)は近世城館の本丸にあたる所。高さ5mの切岸によって囲まれた、直径約50mの円形に近い平坦地です。南北の対称となる位置に同じ形の虎口が設けられており、計画性をもって同時期に築かれたことを示しています。

